

Title	オウイディウス『変身物語』の時代説話とリュカオンの食卓
Author(s)	西井, 奨
Citation	神話学研究. 2 P.38-P.47
Issue Date	2019-12-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/75533
DOI	10.18910/75533
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

1. 序論

オウィディウス『変身物語』(*Metamorphoses*、以下、*Met.*)第1巻では、序歌(1.1-4)と天地創造の描写(1.5-71)の後、その世界に魚・獣・鳥たちが住むようになり(1.72-75)、そして最後に人間が造られたことが述べられた後(1.76-88)、「時代説話」が展開する(1.89-150)。この時代説話では黄金の時代・銀の時代・青銅の時代・鉄の時代と4つの時代を経ることで、もともとは自発的に信義と正義を大切にしていた人間が道徳的に劣化していく様子が描かれている¹。そして、実質的にはこの時代説話の鉄の世代の人間が引き起こしたこと²として、ユピテルが自身に不敬を働いたリュカオンを懲罰したこと³について語る(1.163-243)。

時代説話とリュカオンの物語は、時代説話の叙述で段階的に人間が道徳的に劣化していく、その劣化の極みとして神を敬う心を持たないリュカオンがユピテルを残酷な仕方で試そうとして罰を受けたという点で連続性を有している。一方、『変身物語』において時代説話が述べられるのは第1巻だけではない。第15巻においても、ピュタゴラスがその教説を語るという形で時代説話に言及される(15.96-142)。このピュタゴラスの語る時代説話では、とりわけ人間と動物の関係性に主眼が置かれている。その内容は、黄金の時代において人間たちは動物を殺して食べることなく自然に生え出るものを食べ物として満足していたが、やがて時代が下るにつれて動物を殺して食べるようになったというものである⁴。この内容は第1巻においては明瞭に述べられていない。しかし既にオウィディウス以前のアラトス『星辰譜』やウェルギリウス『農耕詩』で語られる時代説話において、時代を下るに

¹ 時代説話については、中務哲郎(訳)『ヘシオドス 全作品』京都大学学術出版、2013、482-485に、ヘシオドスの五時代説話の成り立ちの研究についてまとめられている。これはオウィディウスの四時代説話を分析する上でも参考になる。

² 『変身物語』第1巻では「時代説話」に直接続く形で、巨人族がオリュンポスの神々に戦いを仕掛け、そして敗れた巨人族の血からまた人間が作られてその人間たちも残忍な者たちだったということが述べられる(*Met.* 1.151-162)。そしてユピテルはこの巨人族の血から生れた人間たちの残虐さを見て、かつて自身が罰を下したリュカオンのことを思い出して怒る(*Met.* 1.163-166)ので、リュカオンは時代説話における鉄の世代の人間だということができる。

³ オウィディウス『変身物語』第1巻での時代説話とリュカオンの物語については、高橋宏幸(訳)『オウィディウス 変身物語 1』京都大学学術出版会、2019、425-437でも取り上げられている。本稿では、ここで解説されている事柄とはまた異なる視点を提示したい。

⁴ ピュタゴラスの語る時代説話では、黄金の時代の描写(*Met.* 15.96-103)の後に、動物食が始まったことについて述べられていくが、銀・青銅・鉄の時代のどの時点のことについてなのかは明瞭にされていない。

つれ動物を食べるようになったということは言及されている⁵ので、オウィディウス『変身物語』第1巻で描写される時代説話も、明瞭に述べられていなくても時代を下るに連れて人間たちがそのような動物食の習慣を身につけたということを念頭に置きつつ理解することも可能であると思われる。そうすると、時代説話に続くリュカオンの物語についても、直前の時代説話で動物食が開始されたことを踏まえると、その物語でのリュカオンの振る舞いに関してさらに具体的な形で時代説話との連続性を見出せるように思われる。そこで本論考では、オウィディウス『変身物語』第1巻での時代説話の描写を補足するものとして第15巻でピュタゴラスが語る時代説話を照らし合わせ、その上で第1巻のリュカオンの物語の解釈に関して新たな視点を提供することを試みたい。

2. 時代説話における非動物食と動物食

オウィディウス『変身物語』第1巻で語られる時代説話では、時代が下るにつれて人間たちが動物食を始めたことについては明確に述べられない。しかし黄金の時代の描写⁶において、人間たちが動物を殺して食べるということをしていなかったことは、その食事内容の描写から推察することができる。以下に黄金の時代の描写を引用する。

Aurea prima sata est aetas,...	89
(...)	
non tuba drecti, non aeris cornua flexi, non galeae, non ensis erat; sine militis usu mollia securae peragebant otia gentes.	100
ipsa quoque immunis rastroque intacta nec ullis saucia vomeribus per se dabat omnia tellus, contentique cibis nullo cogente creatis arbuteos fetus montanaque fraga legebant cornaque et in duris haerentia mora rubetis	105
et quae deciderant patula Iovis arbore glandes. ver erat aeternum, placidique tepentibus auris mulcebant zephyri natos sine semine flores. mox etiam fruges tellus inarata ferebat,	

⁵ 後述する。

⁶ オウィディウスによる黄金時代の描写については、K. Galinsky, *Some Aspects of Ovid's Golden Age*. *GB* 10 (1981), 193-205 も参照。

nec renovatus ager gravidis canebat aristas. 110

flumina iam lactis, iam flumina nectaris ibant,

flavaque de viridi stillabant ilice mella. (Ovid. *Met.* 1. 89, 98-112)

最初に黄金の世代が生まれた。… (...) 銅製の真っ直ぐなラップも、角のように曲がった号笛も、兜も、剣もなかった。兵を用いずとも、人々は憂いなく、穏やかで平安な時を過ごしていた。大地さえも義務を免れていた。鋤を入れられることも、鋤で傷つくこともなく、すべてを自力で生み出していた。人々は、誰一人あくせくせずに出て来た食べ物で満足した。ヤマモモの実や山イチゴを集め、サンシュユの実、固いイバラにはりついたクロイチゴ、ユピテルの木が葉を広げた下に落ちたドングリを集めていた。常春のもと、暖かな息吹で温和な西風が種もなく咲いた花を撫でた。そのうちに大地が耕されずとも作物を産んだ。畑が手入れをせずとも、ずっしり実の入った穂で白くなった。こちらには乳の川、あちらにはネクタルの川が流れ、緑なすトキワガシからは黄金色の蜂蜜が滴っていた。⁷

このように、Ovid. *Met.* 1 での黄金の時代の描写からは人間たちは自然が生み出すものに満足して暮らしており、動物食はなかったことが間接的に窺える。これについてはヘシオドスが『仕事と日』で伝える時代説話でも同様であり、

χρύσειον μὲν πρότιστα γένος μερόπων ἀνθρώπων
ἀθάνατοι ποίησαν Ὀλύμπια δώματ' ἔχοντες. 110

(...)

... καρπὸν δ' ἔφερε ζείδωρος ἄρουρα 117

αὐτομάτη πολλὸν τε καὶ ἄφθονον: οἱ δ' ἐθελημοὶ

ἦσυχαι ἔργ' ἐνέμοντο σὺν ἐσθλοῖσιν πολέεσσι. (Hesiod. *Opera et Dies* 109-110, 117-119)

オリュンポスの館に住む不死なる神々は、まず初めに、言葉持つ人間の黄金の種族を作った。(...) ... 豊穰の大地はひとりでに、豊かに惜しみなく稔りをもたらし、人々は福分に囲まれて、争いもなく、思うまま生り物を享受した。⁸

⁷ 引用しているオウィディウス『変身物語』第1巻のラテン語テキストにあてた日本語訳は、高橋宏幸訳である（高橋宏幸（訳）『オウィディウス 変身物語 1』京都大学学術出版会、2019）。これは『変身物語』が第1巻から第8巻までが訳出されている。本稿では既存の訳を利用するにあたり、固有名詞の長音は単音に、行ごとに改行はしないようにしている（以下同じ）。なお後で引用する『変身物語』第15巻のラテン語テキストにあてているのは、筆者の西井による訳である。

⁸ 引用しているヘシオドス『仕事と日』のギリシア語テキストにあてた日本語訳は、中務哲郎訳である（中務哲郎（訳）『ヘシオドス 全作品』京都大学学術出版会、2013）。

というように述べられ、ヘシオドスによって描写される黄金の時代においても、動物を殺して食べることがなかったことが窺える。ヘシオドス『仕事と日』の時代説話でもいつから動物を殺して食べることが始まったかについては明瞭な形では言及されないが、『仕事と日』の時代説話では、銀の時代において人々が神々に「生贄を捧げようとしなかった」こと（135-136）⁹、銅の時代においては「穀物を食べなかった」こと（146-147）¹⁰が言及されていることから、動物を殺して食べるという習慣が銀の時代や銅の時代においては始まっていたということが間接的な形で示されているといえるかもしれない。

次にウエルギリウス『農耕詩』での時代説話を確認する。『農耕詩』での黄金の時代の描写は以下のようなものである。

ante Iovem nulli subigebant arva coloni: 125
ne signare quidem aut partiri limite campum
fas erat; in medium quaerebant, ipsaque tellus
omnia liberius nullo poscente ferebat. (Verg. Georg. 1. 125-128)

ユピテル以前には、農夫は誰も畑を耕さなかった。田園に標石を置き、境界で区切ることもさえない不敬であった。人々は共同の収穫を求め、大地はおのずと、今よりもっと気前よく、誰が求めなくてもすべてを生んだ。¹¹

ここでも、黄金の時代においては動物を殺して食べる習慣がなかったことが窺える描写となっている。そして『農耕詩』では続いて、

tum laqueis captare feras et fallere visco
inventum et magnos canibus circumdare saltus; 140
atque alius latum funda iam verberat amnem
alta petens, pelagoque alius trahit umida lina.
tum ferri rigor atque argutae lammina serrae
(nam primi cuneis scindebant fissile lignum), (Verg. Georg. 1. 139-144)

そのとき野獣を罟で捕らえたり、鳥もちで欺くことや、大きな林を猟犬で取り囲むことも考え出され、そしてある者は深き所を求めて、広々とした川を投げ網で鞭打ち、ある者は海で水したたる網を曳いた。そのとき硬い鉄と、甲高い音の鋸の刃も作りだ

⁹ ... οὐδ' ἀθανάτους θεραπεύειν / ἤθειλον οὐδ' ἔρδειν μακάρων ἱεροῖς ἐπὶ βομοῖς,

¹⁰ ... οὐδέ τι σίτων / ἤσθιον,

¹¹ 引用しているウエルギリウス『農耕詩』のラテン語テキストにあてた日本語訳は、小川正廣訳である（小川正廣（訳）『ウエルギリウス 牧歌／農耕詩』京都大学学術出版会、2004）。

された——なぜなら昔の人々は、木を楔で割って切っていたから。

と、時代が下って、鉄が利用されるようになると共に狩猟と漁業が開始されたことについて言及されている。ウェルギリウス『農耕詩』ではこのような形で、時代の下りと共に動物を殺して食べるということが示されている。

次にアラトス『星辰譜』での時代説話を確認する。ここでは正義の女神の星座たる乙女座の縁起が述べられる過程で、まず黄金の時代について以下のように述べられる。

ἀλλὰ βόες καὶ ἄροτρα καὶ αὐτή, πότνια λαῶν,
μυρία πάντα παρείχε Δίκη, δώτετρα δικάϊων.

τόφρ' ἦν, ὄφρ' ἔτι γαῖα γένος χρύσειον ἔφερβεν. (Aratus *Phaenomena* 112-114)

ありとあらゆる必要なものをあてがってくれたのは、牛と犁、そして人々を統べ、かつ正しいものを授けるほかならぬディケーだった。これはまだ大地が黄金族の人間たちを養っていた頃のこと。¹²

ここでも「大地が黄金族の人間たちを養っていた」とあることから、他の作家の黄金の時代の描写と同様に、人間たちは自然が生み出すものを食べて満足していたといえる。黄金の時代でありながら既に牛（耕作に使われていたものとして言及されていると思われる）に言及されているのがヘシオドスやウェルギリウスにない特徴である（一方、オウィディウス『変身物語』第1巻の時代説話では、銀の時代に耕作が始まり牛が使われるようになったことが述べられている (*Met.* 1. 123-124)¹³）。それから銀の種族の描写（115-118）を経て、次のように続く。

ἀλλ' ὅτε δὴ κάκεινοι ἐτέθνασαν, οἱ δ' ἐγένοντο,

χαλκεΐη γενεή, προτέρων ὀλοώτεροι ἄνδρες, 130

οἱ πρῶτοι κακόεργον ἐχαλκεύσαντο μάχαιραν

εἰνοδίην, πρῶτοι δὲ βοῶν ἐπάσαντ' ἀροτήρων, (Aratus *Phaenomena* 129-132)

しかし、この人々もやがて死んでしまうと、先代よりさらにおぞましい人間ども、青銅族が生まれ出た。このものたちは初めて追剥の持つ厄介な刃物を鍛造したのだ。また、犁を引く牛の肉を初めて食べたのもかれらだった。

¹² 引用しているアラトス『星辰譜』のギリシア語テキストにあてた日本語訳は、伊藤照夫訳である（伊藤照夫（訳）『アラトス／ニカンドロス／オッピアノス ギリシア教訓叙事詩集』京都大学学術出版会、2007）。

¹³ *semina tum primum longis Cerealia sulcis / obruta sunt, pressique iugo gemuere iuveni.*

このように刃物の製造が始まると共に、耕作に使われていた牛も殺されて食べられるようになったという描写が明瞭になされる。アラトス『星辰譜』でのこのような描写は、本稿で後述する Ovid. *Met.* 15 でのピュタゴラスの語る時代説話とも共通する要素を持つものである。『星辰譜』ではこの後、ディケーが人間を嫌って地上を立ち去るが (133-134)¹⁴、これは Ovid. *Met.* 1 での時代説話における「鉄の時代」の描写においても、人間たちが鉄製の武器を用いて互いに戦うようになり、親族同士でも殺し合うようになって、正義の女神が立ち去っていくこと (*Met.* 1. 141-150)¹⁵と対応する。

Ovid. *Met.* 1 での「鉄の時代」の描写では人間同士の戦い・殺し合いに言及される一方で、アラトス『星辰譜』の青銅の時代の描写のように動物の殺害と肉食については言及されていない。それゆえ、オウィディウスが描く時代説話では世代を下って人間が道徳的に劣化していくに際し動物を殺すことや食べることが始まったことについて、第 1 巻での描写を見る限りではあまり注意が払われていないように見えるかもしれない。しかし『変身物語』では、第 15 巻でピュタゴラスの口からも時代説話は語られ (*Met.* 15. 96-142)、そこにおいては動物を殺すことと動物を食べることが時代の下りと共に始まったということに明瞭に言及される。ピュタゴラスの教説では黄金の時代の描写においても、

'At vetus illa aetas, cui fecimus aurea nomen,
fetibus arboreis et, quas humus educat, herbis
fortunata fuit nec polluit ora cruore.
tunc et aves tutae movere per aera pennas,
et lepus inpavidus mediis erravit in arvis,
nec sua credulitas piscem suspenderat hamo:
cuncta sine insidiis nullamque timentia fraudem
plenaque pacis erant. ...

(Ovid. *Met.* 15. 96-103)

「しかし、私たちが黄金の時代と名付けているかの世代は、木の実や大地が養う草によって幸福であったし、口を血で汚すこともなかった。その当時は鳥たちも安全に翼を動かして空を飛んだし、兎たちも恐れを知らずに野原の真ん中でぶらついた。魚も己の軽信ゆえに針に引っ掛けられるということもなかった。全てのものたちが、畏と

¹⁴ και τότε μισησασα Δίκη κείνων γένος ἀνδρῶν / ἔπταθ' ὑπουρανίη: ...

¹⁵ Ovid. *Met.* 1. 141-150: iamque nocens ferrum ferroque nocentius aurum / prodierat, prodit bellum, quod pugnat utroque, / sanguineaque manu crepitantia concutit arma. / vivitur ex raptō: non hospes ab hospite tutus, / non socer a genero, fratrum quoque gratia rara est; / imminet exitio vir coniugis, illa mariti, / lurida terribiles miscent aconita novercae, / filius ante diem patrios inquirat in annos: / victa iacet pietas, et virgo caede madentis / ultima caelestum terras Astraea reliquit.

は無縁で、何も欺きを恐れることなく、平和で満ちていた。…¹⁶

と、人間が動物を食べることもないので動物も加害されることなく安全に暮らしていたということがはっきりと分かる形で述べられている。第15巻のピュタゴラスの教説ではこの引用に続いて、黄金の時代でなくなると人間たちがライオンなどの肉食動物の食べ物を羨んで動物の肉を食べ始めたこと (*Met.* 15. 103-110)、豚や山羊、羊や牛が犠牲獣として殺されるようになったことが述べられる (*Met.* 15. 111-142)。以上の第15巻の内容を踏まえると、『変身物語』第1巻の時代説話でオウィディウスは時代が下ると共に開始された動物殺しと動物食については明瞭に言及していないものの、アラトス『星辰譜』との対応性や、第15巻のピュタゴラスの教説での時代説話の内容から、オウィディウス自身は時代説話における動物殺しと動物食の開始を認識しており、『変身物語』第1巻での時代説話の描写を読み進めるにあたって、そのことは念頭において読むことは妥当な読み方であるといえる。

3. 動物食と人肉食とリュカオンの食卓

Ovid. *Met.* 15 でのピュタゴラスの教説¹⁷は 75-478 の 404 行に渡っており、とりわけ、「動物を殺して食べてはならない」ということについては先に引用した時代説話の箇所も含めて、特に 75-142, 165-175, 453-478 の 3 箇所に渡って述べられる。その「動物を殺してはならない」ということは、ピュタゴラスが唱える魂の輪廻転生から導かれることであり、以下のように述べられている。

nos quoque, pars mundi, quoniam non corpora solum,
verum etiam volucres animae sumus, inque ferinas
possumus ire domos pecudumque in pectora condi,
corpora, quae possint animas habuisse parentum
aut fratrum aut aliquo iunctorum foedere nobis
aut hominum certe, tuta esse et honesta sinamus
neve Thyesteis cumulemus viscera mensis! (Ovid. *Met.* 15. 456-462)

¹⁶ 引用するオウィディウス『変身物語』第15巻のラテン語テキストにあてた日本語訳は、本稿の筆者の西井によるものである。

¹⁷ Ovid. *Met.* 15 のピュタゴラスの教説については、C. P. Segal, *Myth and Philosophy in the Metamorphoses: Ovid's Augustanism and the Augustan Conclusion of Book XV. AJP* 90 (1969), 257-292, D. A. Little, *The Speech of Pythagoras in Metamorphoses 15 and the Structure of the Metamorphoses. Hermes* 98 (1970), 340-360, P. Hardie, *The Speech of Pythagoras in Ovid Metamorphoses 15: Empedoclean Epos. CQ* 45 (1995), 204-214 も参照。また、拙稿「無に帰す長い忠告——オウィディウス『変身物語』第15巻におけるピュタゴラスの教説の位置付け」『フィロカリア』37 (2020), 1-5 でも取り上げた。

世界の一部である私たちもまた、肉体のみならず翼ある魂でもあり、獣たちの体を館としてその中に入ることもあり得るし、家畜たちの胸の中に収まることもあり得るのだから、(動物たちの) 肉体を安全で尊厳のあるようにしてやろう。その肉体は、両親や兄弟たちの、あるいは何か他の絆で私たちと結ばれた者たちの、いずれにせよ人間の魂を有することもあり得るのだから。テュエステスの食卓でお腹をいっぱいにするのはやめよう。

ここでさらに注目すべきなのは、このような動物を殺して食べることが「テュエステスの食卓」(Thyestea mensa) になぞらえられていることである。「テュエステスの食卓」とは、アトレウスがテュエステスの子供を殺してテュエステス自身に食べさせたということを指している。この場合つまり、魂の輪廻転生によって人間の魂が宿っている可能性のある動物を殺して食べることは人間が人間を殺して食べることに等しいということである。ピュタゴラスの教説の中ではこのように、動物食は人肉食に等しいものとして解釈されている。

オウィディウスが『変身物語』第1巻で時代説話を描くにあたり、動物食の開始のみならずこのような「動物食と人肉食の近似性」についても、そこで明瞭には述べていないながらも念頭に置いていたとすると、第1巻の時代説話での鉄の時代の人間に対するものとしてユピテルが懲罰を加えたと言及するリュカオンの物語に関して、そのリュカオンの振る舞いに注目すべきものが出てくる。それが「リュカオンの食卓」として知られるものである。まずユピテルがリュカオンに初めて言及する際も、

... et facta nondum vulgata recenti

foeda Lycaoniae referens convivium mensae (Ovid. *Met.* 1. 164-165)

起きたばかりでまだ広く知られていなかったリュカオンの食卓での醜悪な宴のことが思い起こされ、¹⁸

と、「リュカオンの食卓」(Lycaonia mensa) という表現を使ってユピテルがリュカオンのことを思い出しているとする。そしてその「リュカオンの食卓」の内容が以下のものである。

nec contentus eo, missi de gente Molossa
obsidis unius iugulum mucrone resolvit
atque ita semineces partim ferventibus artus

¹⁸ この日本語訳については本稿注7参照。

mollit aquis, partim subiecto torruit igni.

quod simul imposuit mensis, ego vindice flamma 230

in domino dignos everti tecta penates; (Ovid. *Met.* 1. 226-231)

だが、それだけでは足りなかった。モロツソイ族から差し出された人質の一人の喉笛を剣で切ると、まだ命のぬくもりが残った体を、一部は沸騰した湯で煮、一部は火にかけて炙った。彼がそれを食卓に盛るやいなや、私は懲らしめの雷火を放ち、主人に似合いの家の守護神の上に館を倒壊させた。

ここでリュカオンは、捕虜の人間を殺し調理した人肉をユピテルに食べさせようとしたことで罰を受ける。このリュカオンがした振る舞いは人肉食に関するものであり、リュカオンの物語が直前の時代説話から連続する鉄の時代の種族の話であり既に動物食が始まっていたということ、そして第 15 巻のピュタゴラスの教説から読み取れる「動物食は人肉食に等しい」という視点をオウィディウスが有していたことを考慮に入れると、「人肉食」を主要なモチーフとするリュカオンの物語を時代説話に続くものとしてオウィディウスが配置したのは、「動物食の習慣を得た結果、最終的に人肉食にも至る」という展開を意図していることだと解釈できるように思われる。

実際、第 15 巻の「テュエステスの食卓」の言及に続くピュタゴラスの教説では、*quam male consuescit, quam se parat ille cruori / impius humano* (15. 463-464) 「(家畜を殺して食べる者は) なんとという酷い習慣をしているのか、なんと非道にも人間の血の為の準備をしているのか」と述べられたり、*quantum est, quod desit in istis / ad plenum facinus? quo transitus inde paratur?* (15. 468-469) 「それらの行い(家畜を殺して食べること)が罪に満ちた行いと隔たっているのはどれぐらいの隔たりか? そこからどこへ至ることが準備されているのか?」と述べられている。これらの表現は、「動物食から人肉食に至ること」を示唆しているとまですると言い過ぎかもしれないが、「人間が人間を殺すこと」を示唆しているのは明白であろう。そしてその「人間が人間を殺すこと」は第 1 巻の鉄の時代の描写からも読み取れるのである¹⁹。

4. 結論

以上の議論をまとめると、次のように結論付けることができる。オウィディウス『変身物語』第 1 巻で述べられる時代説話は、そのテキスト中では明言されないもののオウィディウスに先行する作品や『変身物語』第 15 巻でのピュタゴラスの教説で語られる時代説話

¹⁹ 本稿注 15 参照。

の内容を踏まえると、時代が下ると共に人間たちが動物を殺して食べるようになったということもオウィディウスは意識しつつ描いていると考えられるものである。そしてその時代説話に続く「リュカオンの食卓」の物語は、既に動物を殺して食べることを習慣づけていた鉄の時代の人間が、ピュタゴラスの教説で動物食と人肉食が結びつけられていたように、そのまま人肉食にまで至ったことを示しているのである。このような連続性が『変身物語』第1巻の時代説話とそれに続くリュカオンの物語にはあるのである。

(大阪大学)